
名無したちのレクイエム

fuwafuwa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名無したちのレクイエム

【Nコード】

N4832Z

【作者名】

f u w a f u w a

【あらすじ】

ある惑星に凄腕の殺し屋がいた。正体を知るものはごく一部の人間だけであり、コードネームもそれにまつわって『ファントム』と呼ばれた。

これは生と死の狭間を駆け抜けたファントム達の物語である。

死から始まる序章

死からへの序章

『——ッ！——ッ！——ッ！』

マシンガンのような派手な音ではなく——乾いた銃声が彼女を襲う——

コートからわずかに覗いた銃が、最小限の動きで生命を断つ術だと——無言の言霊を発しているように見えた。

片時も警戒を怠った事はない。それでも——撃つ瞬間まで気付けなかったという事は相手も相当の手練。恐るべき暗殺者として雇われたに違いない。

「——ッ」

声を掛ける暇すらない。

間に合わない——

長年の勘からか、反射的に銃声より前に動いていた。

俺が依頼でもない何の得にもならない事に体をはる。理解っていた。いつかこんな日が来る事があると——業の深い 無意識に裁きを求めていたのかも知れない。

刹那の瞬間——彼女を守る為に盾になろうと身を挺しながら、同

時に慣れ親しんだ懐の銃に手をかけた――

――二つある内の一つ。

サプレッサー付き『ワルサー（暗殺用）』ではなく、『コルトパイソン（用心棒用）』

早撃ちでもっとも最速なのは『^{ハンマー}撃鉄』を1発ずつ起こして

『^{トリガー}引鉄』を引くことによって発射できるシングルアクションの『^{ボルバ}回転式拳銃』。

一ミリのズレもなく腰にかけてある拳銃をホルスターから抜く――と同時に『^{ハンマー}撃鉄』を起こした瞬間に引き金を弾いた――その動作のすべては視認なし。目にも止まらぬスピードを伴って。

『――ッ！！――ッ！！――ッ！！』

サイレンサー付きの銃とは違い、派手な音が辺りに木霊した――

先に抜かれようとも勝てる自信があった。
稀なる資質。――気の遠くなるほどの鍛練。数々の実践で培ってき

た経験——裏付けされた銃技は並大抵のものではない。

しかし、守りながらの戦いは特殊。ハンデを背負って戦っていると
言ってもいい。ウィークポイント弱点を最初から曝け出している為、身動きが制限さ
れる。勝負の行方は——実力以外の要素にまで及ぶことになった。

彼女の刺客か——それとも俺の敵だったのか。頭巾を被っていた男
は——ゆっくりと前のめりになりながら倒れた。

——辺りは騒然となり、男は逃げ出し、女は悲鳴をあげる。

殺気をうまく隠して尾行していたようだが、同じ同業者ゆえに、
最後まで気配を悟られずにはいかなかった。腕もほぼ変わらない。

なぜなら——

ゆっくりと崩れ落ちる——制御を失った自分の身体。

——結果は相討ち。

いや、相手は即死。正確にはまだ生きている方がわずかに上回っていたのかもしれない。運が成せた技か、修練の賜物か。致命傷を受けた時点でたいした違いはない。

喰らったのは右肩、右腹、太腿の3発。

肩は貫通したようで心配するほどでもないが腹には銃弾が埋まったみたいだ。

太腿の血は止まらない。（動脈をやられたな。）応急手当したところで無駄だとわかる。隠れ家までは距離が遠すぎる。病院に行く時間はない。

事の成り行きを見守っていた彼女は、放心から立ち直る。

「——いやああああああ！」

悲痛な叫び声が夜空に響いた。

「——なんで・・・なんであたしを庇うの！？・・・こんな——嘘でしょう？ファントムがやられるなんて——」

留め処なく流れる血量を見て、手遅れだと気付きながらも、現実を受け入れられない心が否定する。

「・・・あたしが——あたしがほんの少し、隙を見せた所為で!!！」

自分の服の一部を裂いて、その布で手当てを施すが——あつという間に真っ赤に染まってゆく。

「ちくしょう!とまれとまれとまれよ——!!・・・誰か、誰か——!!！」

辺りに人の気配はない。撒き込まれたくないと蜘蛛の子を散らすように居なくなっていた。

誰もいない。何もできない自分に絶望、錯乱しそうになる。

「よせ。おまえのせいじゃない。」

彼女が無事だった事だけが何より安心だった。

「でも・・・あたしがいたから――」

彼女の双眸から涙が零れ落ちた。

「人間はいつか死ぬ。少し早まっただけだ。」

審判がついにふりかかったのだと。

人間らしい感情があまり残っていないとはいえ、業の深い生業なりわいをしている自覚はあった。

こういう形であれ、自分は真っ当に寿命を迎えることはないだろうと。

あの日、彼女を助けたのは気まぐれなのか、犯した罪の償いか、今でもわからない。確実に変わった事は甘さという情が芽生え、同時に守るべき存在を手にして、暗殺者としての資格を失った。だが後悔はしていない。生に何の意味も見出せないまま、一人で朽ち果てるはずだったから。

俺にとって何も映さなかった世界。残酷な世界。死を待つだけの世界は――

彼女が――ただ在るだけで――知らず知らず救われていた。

いつしか――かけがえのないものになっていたのを気付かされた。

彼女といった日々は幸せだったのだろう。

だから――

「・・・たった今からファントムはおまえだ。・・・これを持って行け」

彼女にすべてを譲る決心をした。

片時も外した事のない首にぶら下げてあった鍵型のペンダントと愛用のコルトパイソンを渡す。

「——そんな！あたしにファントムなんて無理だ！お願い一人にしないで——」

「・・・理解っているだろう。・・・俺はもう助からない。」

「なにも聞きたくない!!」

「もう行け。・・・最後の死に場所は自分で決める。」

「いやだ!! 離れない!!」

彼女は那场から動かず、頑なに受け取ろうとしない。

「聞き分けないなら——今ここでおまえを撃つ！」

言葉に殺気を込め、ワルサーを抜いた。

「——ッ!!」

ここで泣き叫んで縋り付くようなら、本当に撃たれるかもしれない。
俺の気質を知っている彼女はその意味を理解するはずだ。

互いの視線が交錯する——

一瞬よりも長く、少しより短い。無数の言葉が無言で飛び交う。

——裁定は下った。彼女は決断をする。

「——った・・わかった!行くよ!行けばいいんだろ!!・・で

も——あたしは・・・あたしは絶対にアンタを忘れない——!!
そして、アンタから継いだ技で生き抜く!!
ファントムを証明し続けるから——絶対・・・ぜったいに——!」

涙を拭い、焼き付けようとするほどの気迫で睨んだ後、一度も後ろを振り返らず走り去った。

『それでいい』

誰にも聞こえない声で呟いた。

(今度は俺が覚悟を決める番だな。)

まだわずかに残った力で立ち上げる。残り時間は少ない。早く——見つけなければいけない。誰にも邪魔されない場所へ。

辺りは人通りは多くないがさっきの銃声を聞いた野次馬がやってくるかもしれない。

騒がれると面倒なのでコートで出血を隠す。足がふら付いているのはただの酔っ払いだと思われるはずだ。

動悸が激しい。眩暈も襲ってくる。貧血の症状が刻一刻と強くなる。それでも、こんな人通りの多い場所で無様に倒れてたまるものかと氣力を振り絞る。

そして——やっとの事で大通りを外れ、路地裏に入った。

血液を流し続ける身体は反比例するかのように重くのしかかるようになっていた。水中を潜って歩く感覚に似ている。

「——ッ!」

思ったように動かなくなった身体に舌打ちが込み上げる。

寂れた路地裏の曲がりくねった道を進んで行くとゴミ捨て場のような行き止まりがあった。

（ここがお似合いだな）

これ以上は歩けそうにないから頃合いだろう。もう二度と立ち上がれない事を覚悟して、その一角で腰を下ろす。ここまで来れば簡単に見つかりはしない。

一服しようと吸えない煙草を取り出し、火を点けようとした――が手先が震え、ライターは手の平から零れおちるように地面に落下した。

（しょうがねえな）

火のない煙草をкаろうじて啜えた。

「――人は死すともファントムは死なず――」

誰に聞こえるでもなく呟いた。

（これでいい。俺の人生案外悪くなかったのかもしれない）
これまでの生活が走馬灯のように過ぎ去っていく。

意識が朦朧とする中、彼は最後に笑った。

煙草は音も無く落ちて、転がっていた――

2章

あたしは——走った。

体力の続く限り——目的はない。行く場所もない。帰る場所も目指すものもなくなった。闇の中をただひたすらに——無心で走る。

流れる景色にも目もくれず、無意識に人の少ない場所へ。何処に向かっているかさえわからず。

——限界ぎりぎりの勢いは長く続かなかった。

持久力を試されるように意識的には恒久、現実では短く。体中の筋肉がこれ以上動くなと警告の悲鳴をあげる。動悸は徐々に激しくなり、血液中の酸素は全身に廻りきらなくなる。酸欠、貧血に近い症状があたしの体を支配していく。

暴走を続け、命令からはずれた身体は、ついに——路上の小さな何かに躓いた。

スローモーションのように前から地面に倒れ込んでゆくのが理解る。

「ツツツ——！」

受け身はとれない、とらない。慣性が赴くままに身をまかした。来たるべき衝撃に身構える事すらない。顔面から突っ込んむ。今のあたしには身体的な痛みなどものもしなかった。

「――」

再び静寂が辺りを覆う。

俯けに転がった体はしばらく動かなかった。

「――ッ」

――両手で土を握りしめ、汚れてしまった顔から枯れたはずの水滴が頬を伝う。

「・・・くう――ちっ・・・く・・・しょおおおおお!!」

何も考えないように全力で走っていた。もう二度と会えない事など考えたくなかった。夢であってほしいと願った。目が覚めたら彼は傍にいて、いつもの無愛想で不器用な笑みをみせてくれるはずだと。これ以上過酷な現実をあたしに与えるな――

駄々をこねる子供のように、まだ大人になりきっていない弱い少女

の心を彼女は自覚する。身を切り裂くような衝動を抑えられない――身内に近い死別など経験した事などない。

（やっぱり離れるべきじゃなかったのでは――？まだ生きているのでは――？今からでも引き返せば、間に合うかもしれない――だめだ！だめだ！！彼を悲しませるだけだ！あたしは彼に何を言った！？・・・でも、でも――もしも、あの時、あたしが言う事を聞かなければ、彼は本当に私を撃つただろうか――？それとも、軽蔑して罵倒する？・・・身捨てる？・・・わからない。）

そのどれも当てはまらない気がした。それにもう選択は為されたのだから。考えても仕方がないはずなのに。

彼といった日常は当たり前になっていた。こんな簡単に失われるはずがないと思っていた。

（あたしは――これからどうすればいい――）

気の済むまま走り、泣き叫ぶ事で心は、平静を取り戻しつつあった。

しかし、消耗した身体はまだ回復を要求していた。

俯けから仰向けになり、空を見上げる。

永遠に近い星の輝きを恨みがましく見つめて、

(もういい。・・・疲れた。)

そのままゆっくりと、瞼を閉じた・・・。

死んだように動かない地面に転がる影がある。

(・・・。)

微かな風の囁き以外何も聴こえてこない。意識は目の上から頭の方へ。そこから肉体を離れ、虚空を飛んでいるような感覚。自分でも眠ったのかどうかさえわからない。あたし達にとって寝ると言う行為は死に等しい。完全に眠ることはない。身体機能を休めるだけの作業。

安らかに眠れる時が来るとしたら、それは二度と目覚めない永遠の

「――」

どれほどの間そうしていたのだろう。時間の推移は曖昧。刻一刻ときざむのは鼓動のみ。呼吸は規則正しく一定。頭の上から手足の先まで研ぎ澄まされているが解かる。景色は変わっていない。

目覚めの刻の近づいている。

あたしは機能を停止した機械のような肉体に覚醒を促す。

すうっと目を開いた。

「——フウ……」

深呼吸をする。心は平静を取り戻していた。同時に言いようのない虚しさが胸に広がる。

想い出も悲しみも風化するなら、忘却してしまうのがヒトの定めなら、

（あたしは違う。失わない——）

自然と拳を握りしめていた。揺ぎ無い決意を新たに心へ誓う。

（戻ろう……。）

転々と変えていく隠れ家の何処かへ。それにはまず現在地を正確に把握しなければいけない。

（ここは何処だ？……あたしとした事が……。ツハ……。）

ガムシヤラに走ってきた所為で、何処をどう通ったのかも覚えていない事に苦笑が浮かぶ。

気を取り直してから周囲を見渡して街の構造、状況に記憶を照らし合わせてゆく。

賑やかな街の中央から繁華街を抜けて、スラム地区のはずれ辺りまで来たのだろうか。おおよその検討をつけた。

その時——遠くから近づくものの気配を察知する。

（——ッ！もう刺客！？）

後少して状況分析が終わり、考えがまとまりそうだったのを遮断された為、舌打ちが漏れた。

——あたしは切り替える——

すでに冷徹な暗殺者の顔に変貌している。

空気の流れ、地面の振動、招かれざる者の動向、どんな微かな音も見逃さない。五感を導入して全神経を集中させる。

（二度とヘマなどするものか！）

怒りに染まりそうになるのを冷静に受け止め、程よい昂揚感を維持する。

相手の技量が凄腕だろうが上だとしても、

（これからその先も誰にも負けない——負けられない。ファントムの名を継ぐ者として！！）

（——駆け引きはやめだ！・・・さっさと勝負をつけてやる！！）

「——誰だ！！そこにいるのは！！」

自分と相手の存在を明らかにして、威嚇しながら相手の出方を伺う。

静まり返っていた辺りから、地面を踏みしめる音だけ微かに読み取る。

音は十メートル以上離れた薄汚い建物の路地の暗闇の方から聞こえる。

「・・・今、あたしに構うな。死にたくなかったら消えろ！」

座ったままの姿勢でベレッタを瞬時に抜き、腕のみを闇の方に構える。

銃を抜く動作は彼に優るとも劣らない。^{フアントム}

相手の反応次第ですばやく回避行動がとれるように片膝を立て、中腰の態勢に変える。

辺りに静かで人は居ないのにも関わらず、緊迫した空気が走っている。

——均衡をやぶる声が遠くの路地裏から聞こえてきた。

「・・・そんなに警戒しないでもらえますかね」

どこか人を馬鹿にしたような調子外れのある独特なトーン。聞く者をいやでも惹き込む強制力。話術に関しては天性のものがあ

しれない。

(この声は・・・)

バーニーD。バーニーか、Dデイの略称で大体呼ばれている。本当の名前かどうかすらもわからないがどうでもいい事だ。あたし達がよく使っていた便利屋。有益な情報と仕事さえ持ってくれば何だっていい。

浅黒い肌にミスマッチするような柔和な作り笑いはサングラスから透けるようなギラギラした目には似合わない。たっぱ(身長)はあたしとほぼ変わらない小柄な方だが反面鍛えられたしなやかな筋肉を全身に纏っていて、大きく見える印象を持つ。こいつも稼業上、危険と隣り合わせな生活をしているのだろう。

「さすがは、バーニーさん。この距離からわたしに気付くとは。」

言葉を発しながら、無警戒で歩いてくる。

バーニーはあたしの仮の名前。

ファントムがバーニティとつけてくれた。意味はないと本人は言っていた。他の奴に聞いたら、phantom(亡霊)とvanity(虚無)は似たような事柄だそうだ。呼びにくいから自然と省略されて今に至る。

世界にとって居ても居なくてもいい存在。名前でも似たもの同士だったんだと気付かされる。

「それ以上近づくな!・・・コンタクトはとってないはずだが」

銃の照準は以前Dに向いたまま。

「・・・情報を持ってきたんですよ。」

ぶら提げていた両手を胸の方まで腕をあげて、敵意はないというアピール『やれやれ』といったジェスチャーで証明する。

「情報？・・・頼んだ覚えはない。」

「貴女に関係する事ですよ。バニイさん・ファントムさんは――」

「――ッ!!」

最後まで喋りきらない内にコルトパイソンの発射音が言葉を遮断した。

「――その先は言うな。もう知っているんだろう？・・・命の保証はできない。」

ベレッタを持ちながら、もう片方の腕でパイソンをばなした。

「怖いですねえ・・・。今の貴女は殺気の塊だ。耳寄りな情報ですよ？」

そう言いながらもDの調子は変わらない。彼も職業柄、相当な修羅場を潜っているのだろう。

「手短に話せ。彼の事は言うな・・・今日は虫の居所が最高に悪い。八つ当たりしたくて手元が狂っちまいそうだ。」

「

「まあ、誰かに聞かれて困る話でもないですが。

「理解しました。・・・では尋ねます。貴女は鍵型のペンダントをお持ちですか？」

——呼吸を忘れた。

怒り、悲しみ、悔み・・・色んな感情が混ざり合い複雑な気持ちになる。

心を落ち着かせる為に一呼吸した。

「・・・ある。」

「でしたら、これを」

懐に手を入れようとする。

「——おかしな素振りをみせるんじゃない！・・・今のあたしは誰も信用しない！」

「困りましたねえ。お渡ししないとわたしの役目が果たせないんですが」

全然困っているように見えない。表情は変わっていない。

「・・・」

Dを睨んだまま、あたしは警戒を緩めない。

「でしたら後ろ向きになってブツを置きますよ？」

「・・・わかった。でも、振り返ったら容赦しない！」

埒があかないと思い妥協して、Dの一挙一足を注意深く見守る。

Dは後ろを向いたまま胸の方に手を探り入れ、何かを取り出したかと思うとゆっくりと屈んで、足元に鋼鉄製の小さな箱のようなものを置いた。

「・・・なんだ？」

ここからの距離でははっきり見えない。

「預かり物です。鍵を持っていないければ、お渡ししない代物ですよ。・・・ではわたしはこれで。」

もう用はないと立ち去ろうとする。

「・・・情報は？」

「その中にあると思いますよ。」

振り向かずには答えながら、離れて行った。

一人残されたあたしは地面に耳を当てる。例え1%に満たない事でも何がおこるかわからない。可能性を考えて最善を尽くすべきだと

教えられたからだ。この場合はまだ罨ではないという確証は得ていない。タイマーのようなものは鳴っていない。

傍まで寄って見ると持ち運べる金庫のようなものだった。鍵穴がある。

外観は大丈夫そうだと判断して、手に取って持ってみる。鋼鉄製の箱の重みしか感じられない。少し揺らすと中では紙の擦れる音がした。

どうやら本当に害意はないようだ。鍵穴にペンダントの鍵を差し込む。

「ッ」

長く使われなかった為か、なかなか回らなかったが、少し強く力を入れると鋼鉄製の箱は、音がしてロックを解除した。

中から出てきたのは、古ぼけたメモ帳のようなものとチケット、書類のようなものの三つ。

（なんだぁ・・・？）

ある程度身構えていた分、拍子抜けだった。

まとめて取り出そうとすると、3つのどれかに挟まっていた一枚の紙切れが空中に舞った。

ひらひらとゆっくり落ちてゆく。自然に視線はそちらの方に注目していた。

何か書かれている。

『バニイへ』

（――彼の私物じゃなく、あたし!?!）

信じられない気分で、3つのものを大まかに目を通していく。
チケットは見てもなんなのかよくわからない。小さな書類（通帳）
を開けると数字がたくさん並んでいる。頭が痛くなりそうなので後
にまわす。

メモ帳を開くと字が書かれていた。

（ッ・・・！？）

予測していない事に息を飲みこんだ。

1ページ目には

『これだけは最初に言っておく。ここでの生活を変えたくないなら、
これ以上見るな』

『一言付け加える』

『こんなものを書くのも残すのも柄じゃない。感謝しろ』

（・・・よく言うよ。こんなものを残しておいてさ、一人でさっさと
いっちまいやがって・・・似合わないんだよ！）

また涙が込み上げそうになる。感傷に浸ってる場合じゃない。優先
すべきは内容だ。早く読んでしまわないと。

もちろん、読まないという選択肢なんて今のあたしにはない。

次のページには

『字など書き慣れていないから簡潔に言う』

『俺はおまえの傍にいない』

『クリスティーヌファミリーのドンを頼れ』

『チケットは地球行きのものだ。どうするかはおまえが判断しろ』

『通帳は俺の口座だ。金は全部くれてやる。よく考えて使え』

『パスワードはおまえならわかる』

そう書かれていただけだった。

残りのページは捲っても捲っても白紙。

「・・・ハッ・・・」

溜息が自然と出る。

（・・・ほんっ・・・とに簡単だな！遺言のつもりじゃないのか？・・・わたしを愛していたとかもって色々書きやがれ！バカヤロー！）

メモ帳なのに2ページしか使われておらず、感情のこもっていない様子が文章にまで出ていて、悲しみを通り越して思わず怒りが込み上げた。

「・・・・・・・・」

もう一度書かれていたものを反芻して、しばらく考え込む。

（・・・こういう奴だったな。なんであたしを助けたのか何回聞いても答えてくれなかったし、あたしが何度誘っても最後まで手をださなかった。そりゃ昔は小便臭いガキだって自覚はあったけど、女になったらいけると思ってた。ゲイだと疑った時期もあった。けど違う。一緒に行動してわかった。あいつは何も望んじやいなかった

た。なら、あたしはあいつにとって何だったんだろう・・・止そう、今考えるべきは過去じゃない。）

長く物思いに耽っているとあらぬ事まで浮かんでくる。

（もう一度整理しよう。

地球行きのチケット？こんなもの普通じゃ手に入らないのに。ユー
トピアとか言われているあそこに行くのか？このあたしが！？・・・
場違いにもほどがある。今更平和ボケした連中の住処に行けと？・・・
・どういうつもりだったんだ？・・・それになぜ、金を？あたしの
為に残してくれた？・・・違うな。ならペンダントは最初から渡し
ておくはず。・・・だめだ、まるでわからない。）

色々な事が起こりすぎて、頭を抱えなくなった。

そうして考える内に一つだけ、行くべき場所を思い当たる。

メモに書かれていたように

（・・・ドンを頼れ？・・・っ！・・・クリスティーヌファミリーなら色
々知っているかも知れない。明日会いに行って、確かめるしかない。
）

彼女は結論を出すと大きく息を吐いた。

第3章

ここに長く居すぎるとまた面倒事が増えるかもしれない。

さっさと帰るべきだと、あたしは街のスラム地区から目立たないように抜け出して、郊外にある現在の隠れ家に使っている場所の一つへ向かう。

極力、人目を出来る限り避けて歩いていると、前任達の夢の跡が見えてきた。

廃墟となった工場の跡地。

地球に負けないぐらいの楽園を築こうとして失敗した結果か——何年ほったらかしになっているかわからない。

建物は激しく損傷しており、外から中の様子が見える部分があったり、窓にはガラス一枚残っておらず、もぬけの殻。使えそうなものはガラスの破片だろうが鉄クズでさえ、ならず者達が持つて行くからだ。そのおかげか、あたし達、アジトをもたない種の間人には、うってつけの場所である。

問題がないというわけでもなく、浮浪者、ならず者、同種の人間と同じ目的でかち会うことがあるという事。基本的には強ければ住権を得る。危険が迫っても次の廃屋を探せばいいだけ。

（ここもそろそろ引き払った方がいいな。）

同じ場所に長く居すぎると嗅ぎ付けられてしまうからだ。

その心配は現実となる——

廃墟に近づくと、

（ッ！・・・いる。）

今日はとことん寝かせないつもりなのか。有名になるのも考えものだと思う。ファントムは凄腕として君臨していたから。名乗りをあげにくる奴、復讐にやってくる奴、依頼にくる奴等多過ぎて検討もつかない。

人数は・・・1. 2. 3. 4人。全員その手の筋では素人だ。こちらに気付く素振りすら見受けられない。

（襲撃者ではない？）

この場所を知っていたのは、今の所Dだけしかない

（あたしがこの程度の奴ら相手にくたばる事はないと知ってて、タレ込みやがったな。）

情報を買っただけで悪気はないんだろう。

（プレゼントをくれたと思ったら、おみやげまで残していくとは聞いてない。）

明日文句を言い鉛玉をくれてやろうかと毒づく。
それから、事態をどう収めるか考える。

（あたしはファントムとしてどう対応するべきだろう。・・・1.

問答無用でヤル？ 2. 呼びかける？ 3. 場所を変える？)

1. 無駄な争いだな。素性もわからないままだと後々面倒な事になるかもしれない。 2. 甘すぎる。的になりにくくようなものだ。

3. 正解に近い。彼ならそうしたはず。あたしは――

――どれも選ばない。

少し観察してみようと音を立てないように近づいていく。何の目的でここにいるかだ。侵入者の動向を観ることにする。

苛立った声が聞こえてきた。

「本当にここか？・・・野郎、嘘を教えやがったんじゃないやろうなア。」

闇撃ちの線は消えた。声を出す事態、致命的。それに、このやる気の無さそうな声と特徴。聞き覚えがある。

(ツ・・・またか・・・次から次へと今日は、いい加減にしてくれ。)

あたしの記憶が間違いでなければ、ある意味最悪の相手だ。

相手はカタギリ(片桐)だろう。頬を刃物で切られた跡が大きく残っており、強烈な第一印象を持つ。

ヤマグチの構成員だ。残りは奴の手下のはず。

ヤマグチ――

この星では無数の組織が散らばって存在する。^{カセイ}あたしが知る限り、中でも巨大なのは

『クリティースファミリー』

『ヤマグチグミ（組）』

『ノスフェラグループ』

の3つ。

その頂点に立つ男達の名前が

『ドン・カルネポーラ・クリスティース』

『大親分・カミオカ・ナオト』

『ビッグボス・ジャステイン・レバンノン・ノスフェラ』

幸か不幸か一人だけ面識がある。言わなくてもわかるだろう。後
は小規模なグループ、徒党の多くが小競り合いを続けている状態。

楽園である地球から、わざわざこの星に来てまで覇権争いなんてご苦労な事だ。

金、土地、権力が絡む所にはいつの時代も醜い争いが尽きない。

3つの組織は地球でもかなりの権益を持ち、成功を収めているのだから、もう充分だろう。つくづくヒトの欲望には際限がなく、罪深いものだと思い知らされる。

どちらにしろ、あたしには縁のない話だし、今のところ興味もない。
(このままばっくれてしまうか?・・・だめだ、こいつは蛇以上にしつこい。)

用件は・・・いつも通りだと想像したが聞くしかないんだろう。頭が痛い。

「いい加減にしてくれない?」

隠れたまま、ベレッタをいつでも撃てるように準備して、声をかけた。

「おう? やつと、けえってきやがったかア。」

独特な口調で喋るコイツはやはり間違いない。

「姿ア見せろや?」

静かにドスの効いた声で言い放つ。

「お断りだ。」

即座に答える。反射的に口について出ていた。

「コラァ！片桐さんが下手にでてりゃあ図に乗りやがってえ、でてこんかい！！」

「誰に口聞いてんのか、わかってんのかあ！？」

手下達が口々に意気り立つ。下っ端というのはなんでこうお決まりの事をするのか理解できない。立場が弱いからこそだろうか。

「うるさい。」

「なんだとう！？調子にのってんじゃねえぞお？アァ！？」

「片桐さん、コイツ、もうやっちまいましよう？」

「へえ・・・ヤルの？」

あたしは自然とうすら笑いを浮かべる。

「てめえ！？」

手下達が殺気をはしらせ、獲物に手をかけようとした。

「――抜いたらアンタの人生終わるよ。」

凄味を効かせた声で言い放った。

冷水を浴びせられたように先程の勢いは一瞬で消えさる。

誰一人動かない。

——緊張が走る。

手下達の一人が間に耐えきれず、唾を飲み込んだ。
あたしの感覚はそれさえも——察知する。

（どうする？本気で消すか？）

手下をやったら片桐も黙っていないだろう。なら一緒に？・・・片桐もなると後が黙っていない。曲がりなりにもヤマグチの中でそれなりの位置に居座っているからだ。それに無駄な殺し、争いはファントムの主義に合わない。

決めかねていると

「——やめとけエ。おまえらじゃあ、勝てん。おとなしくウしとけやア。」

空気を読まない片桐の声が膠着状態を破る。

『へ・へイ！』

手下達は恐縮しながら、声を揃えて従う。

「バニイ、おめえもよう、今日はア喧嘩しにきたんじゃねエんだか

ら、あまりい挑発するなや。」

「・・・その手下に言いな。・・・それで？アンタの用事は？聞くまでもないけど。」

うまく場を収めてくれた事に少しだけ感謝しながら、態度は改めない。あくまで強気を貫きとおす。

何回言われたかわからない殺し文句がまた聴こえてきた。

「そうだア。わかってんじゃねえかア。俺の女になれや。」

「・・・」

いい加減聞き飽きた言葉に心底うんざりした。

「おりゃあよウ、ひと目見たときから、ずっと、おまえに目をつけてたんだよウ。俺の女になったらア、今までの事を、水に流せるように、親分に頼んでやる。」

「必要ない！何度言えばわかる！？——あたしはファントム以外の男は愛さない——」

物陰に隠れたまま後ろの壁にもたれかかり、無意識に左手を胸に添えて目を閉じた。

「・・・死んだ男に操を立てるってかア？美しい台詞だなア、オイ？この世界なあ似合わねエ・・・くたばっちまったらあどんな奴もおしまいだって、おめえなら知ってんだらうよオ？」

言いながら、足元の石がそうであるように軽く蹴った。小さな石ころはあたしが隠れている方に転がる。

「黙れっ！あたしの中では彼は生きてる！」

心の奥底では死というものに対して片桐の言う事を肯定していたが認めたくない感情が言葉の語尾に強く出る。

「そうかい。まア、今日の所はけるわア。・・一つ、忠告しておいてやる。おめえを狙ったのはアたぶんノスフェラだ。もう一人でどうにかなる相手じゃねえだろう。気が変わる頃にまたくるわア。くたばるんじゃアねえぞ。」

そう言うなり、先頭に立って去っていく。

手下達はこちらの方にそれぞれ悪態（中指を立てたり）をついてから、片桐の後を追っていった。

あたしは最後の言葉が引かかって、しばらく動けずにいた。

片桐の言う事には一理ある。

一人となった今、更に女でありながら、この世界を生きていくにはファントムの肩書があっても難しいかもしれない。彼が一人でやってこられたのは男であり、独自の確固たる信念を持ち、あたしより優れていた銃技があつてこそだと思う。あたしには現状を打破するピースの欠片はあっても埋めるべき場所を迷いあぐねている。様々な面で発展途上だと言える。だからと言って片桐の女になる選択肢は絶対に無い。そもそも生理的に受け付けない。

（寝よう。・・彼らに会えば答えは出るはず。）

明日に備える為、廃墟の隅でいつもの仮眠の状態に入る。

膝を抱えたままの姿勢で一度だけ深呼吸をして、瞳を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4832z/>

名無したちのレクイエム

2012年1月7日03時50分発行